

## 本号掲載の論文要旨

### 「風吹けば」詠の語り

—『大和物語』第四百四十九段論—

玉田沙織

『大和物語』は歌物語ジャンルの作品とされるが、その和歌の位置づけは、十分に明らかとは言えない。本稿では、『古今和歌集』『伊勢物語』に重出歌を持つ第四百四十九段の考察を通して、和歌への関心を論じた。『大和物語』に特徴的な草子地を持つ当該章段は、和歌の中の言葉を基点として、詠歌状況に着目した語りを作成する。「風吹けば」詠は、現実を再認識させ、嫉妬心を増幅させる歌として語られている。状況への着目にかがわれるように、『大和物語』の和歌は、表現の形成過程への関心に基づいて語られる傾向がある。

### 夕霧巻にみられる歌物語の系譜

—帚木巻を起点として—

内藤英子

夕霧巻と帚木巻は冒頭の語りや歌物語的性格などが共通しているが、二つの巻の表現上の比較を通して、空蟬と落葉宮の物語の語りの類似や、品定め、「指喰いの女」と「浮気な女」がそれぞれ雲居雁と落葉宮に対応することを明らかにし、夕霧巻が第一部の帚木巻を起点とする歌物語の系譜にあることを位置づける。そこに反復して描かれるのは、妻の嫉妬による夫婦のいさかいであり、背景には「長夜の闇」や宿世など仏教的世界観が横たわり、常に女性の生き方が問い続けられていることを考察する。

### 方丈記の語り手蓮胤と災害叙述

岡山高博

本稿では、作者自身を登場させた『方丈記』の災害記事の臨場感について、それが作品末尾に記された「桑門ノ蓮胤」の署名とどのように関連するのか考察を試みた。『方丈記』の五大災厄において、長明が大火や辻風等の災害そのものと夥しい数の死者の姿を正面から取り上げ、都に遍満する穢れを文学作品の表現として対象化しえたのは、反社会的境遇において死者の鎮魂供養にかかわる遁世者「蓮胤」を書き手に設定したからであり、それは慈円の『六道釈』に見られるような仏教的観想に基づく記述としても捉えられる。

岩瀬文庫蔵奈良絵本『住吉物語』の位置づけ

鹿谷祐子

本稿は、西尾市岩瀬文庫に所蔵されている濃紺色表紙奈良絵本『住吉物語』の本文の性質を明らかにしようとしたものである。岩瀬本は、改作末流本として従来考察の対象とされることが少なかったが、『住吉物語』の享受と発展を考える上で興味深い伝本である。三冊本の中冊半ばを境に本文の系統が大きく異なっており、和歌には自由な改変が加えられ、脇役の人物に特定の名を与えらるゝといった特徴がある。全体として、少将が姫君を手に入れるためのハードルを高く設定し、恋愛譚としての物語を盛り上げていこうとする傾向がうかがえる。

一九三〇年代の〈山岳文学論争〉を巡って

中村 誠

一九三〇年代には山岳雑誌上で頻繁に「山岳文学」とはどうあるべきかという問題が論じられている。浪漫主義的な旧来型の山岳紀行文が行き詰まり、新たな表現方法が模索されたのである。こういう問題が提起される背景には、当時の山岳界が「探検登山」の時代を終え、次代の登山形態へと移行する過渡期にあったということがある。山岳文学の場合、文学としての表現以前に登山が前提となり、山岳文学はその行為と表現との相関の中で成立する。〈論争〉での種々の主張を〈文学志向主義〉と〈山岳優先主義〉の二点に整理し、一九三〇年代の文芸思潮も絡めて〈論争〉の意味と行方を考察した。

川端康成と西川博士の「温泉報国」

雑誌「温泉」にみる「雪国」の同時代的言説  
李 明喜

川端康成が日本温泉協会の『温泉』において追求めた「温泉文学」という概念を念頭に置き、その掲載誌の記事に注目してみると、『雪国』の読みはどう変わるのだろうか。本稿では、『雪国』が書かれた昭和十年から二十三年までの間、物語に〈温泉場〉という装置がどう描かれ、それが当時の温泉場をめぐる言説とどう関わっているのかを解明したい。

## 「VダケV」におけるダケの諸用法について

張 培

本稿は、〈対象要素〉と〈他の要素〉との関係という観点から、「VだけV」におけるダケの用法について考察を行うものである。ダケの前後が同一の動詞である場合と異なる動詞である場合の二類にわけて、それぞれの用法や統語的な特徴を考察した。また、ダケの前後が同一の動詞の場合、意志動詞と無意志動詞に分けて、Vが「限界のある最大程度・量」か、「無限大の程度・量」を表すかを区別することができる。このような分析によって、「期待される事態を伴わない」という含みの有無をも説明可能になる。

## 訳語「天使」の受容過程

— 明治から昭和戦前を中心にして —

加藤 早苗

聖書用語の多くは明治期における和訳聖書を介して受容され日本語として定着してきた。しかし、「天使（てんし）」が「Angel」の訳語として聖書に採用されるのは昭和戦後の事である。

ところが、「天使」は明治後期から「Angel」の訳語として使用され、現在に至るまで聖書用語として認識されている。本稿では文学作品・新聞用例・辞書等を調査対象として、明治から昭和戦前における訳語「天使」の受容過程を明らかにした。